

藤枝市史だより

第6号

平成14年3月20日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
TEL 0544(64)511000
FAX 0544(64)511001
〒426-0014 藤枝市若王500(蓮華寺公園内)

E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

天文五年の花蔵の乱

花倉を舞台の一つとした今川氏の家督争い

はなぐら

戦国大名の今川氏というと、永禄三年(二五六〇)五月の桶狭間の戦いで織田信長の奇襲によって討ち取られた今川義元がまず思い起こされるでしょう。今川氏は義元の代に大名権力がもつとも強くなつて最盛期を迎えましたが、その義元も一

八〜九歳のとき家督を継ぐにあたって異母兄と戦火を交えるという苦い体験をしなければなりません。これが天文五年(二五三六)五〜六月に起こった花蔵の乱で、市内でも花倉城(葉梨城)周辺で戦闘が行われ乱の一大舞台となりました。

乱の発端は天文五年三月十七日に前当主・今川氏輝(今川氏親の長男)が二四歳の若さで急死したことによります。さらに同じ日に氏輝の兄弟である彦五郎も死去しています。二人の兄弟が同時に亡くなったことによつて今川氏の家督をめぐる危機的な状況が生じます。氏輝には子がなかったため、家督候補者として僧身分になっている氏輝の二人の弟が挙げられました。

一人は今川義元で、氏親の三男または四男とされています。母親は氏親の正室であった中御門宣胤の娘(晩年出家して寿桂尼と名乗った)です。氏輝が亡くなったとき義元は善得寺(富士市今泉)の喝食(食事)を担当する少年僧で、「梅岳承芳」という僧名でした。彼には養育・補佐役として臨済宗の僧であり軍師としても名高い太原宗宇雪斎が付いており、正室の子である義元が家督継承者としてもつともふさわしい存在でした。

その義元と争ったのが異母兄の今川良真です。彼は氏親の次男または三男として、義元の兄でしたが、母親は今川氏重臣である福島氏の娘で、氏親の側室でした。当時、良真は遍照光寺(市内花倉)の住持になつていたので、「花蔵殿」「花蔵」と表記されています。僧名は玄広恵探(けんこうゑたん)でした。良真は年下の弟が自分を差し置いて家督を継ぐことに反発して、外祖父である福島氏一門に擁立されて武力での家督相続をはかります。

今まで花蔵の乱について、寿桂尼・雪斎によつて支えられた義元方が多くの家臣の支持を取り付けたのに対して、良真方は福島氏を除いて味方する者が少なく、多勢に無勢の勝算なき反乱で

あったと説明されてきました。そして義元軍によつて花倉城を急襲され、『駿河記』によれば良真は近習らとともに瀬戸ノ谷へ逃れ、六月十日に普門庵で自害したといえます。すなわち従来の説は花倉の地を中心とした今川良真軍による局地的な反乱で、ごく短時日のうちに終結したという見方でした。

ところが一九九〇年代に入つて乱についての数ある論文が発表され研究が深められました。まず花蔵の乱という名称が「花倉で起こった反乱」ではなく「花蔵殿(今川良真)が起こした反乱」という意味で、戦闘エリアが志太地域に限定されるものではないと説かれました。当時の史料から今川館のある駿府周辺や由比城などで両軍の戦いが行われており、良真擁立派の軍事行動が広域に及んでいたことが明らかにされました。そして良真方に味方した今川家の家臣についても、福島氏以外に朝比奈氏・斎藤氏などの有力家臣の一族(庶流)や中小の土豪が加わっていたことがわかりました。『駿河記』には藤枝水上に居住したという石野河内守が良真方に属して戦死したと記されています。このように花蔵の乱は局地的な反乱ではなく、今川家臣団が義元擁立派と良真擁立派とに二手に分かれて領国規模で行われた政権争いと位置づけられました。

義元にとつて予断を許さぬ兄との家督争いでしたが、義元方に付いて大きな戦功を挙げた武將がいます。それが岡部左京進親綱で、当館所蔵の岡部文書には義元が最大級の表現で親綱の戦功を賞している文書が二通あります。花蔵の乱は良真の自害によつて天文五年六月八日ころ幕が閉じましたが、戦後処理として五ヶ月ほど経った十一月三日の日付で書かれています。一通は義元の自筆で書かれたと記され、「義元の子孫末代に対して親綱の忠節は比類ないものである」と賞しています。親綱は乱のとき駿府館や方上城(焼津市方上)・葉梨城の戦いで尽力し、また良真方に奪われた今川家にとつての重要書類「御注書」を取り戻した戦功を認められ、没収された敵方の所領を交付されています。

花蔵の乱を勝ち抜いて今川家当主に就いた義元はその後良真擁立派の粛正を厳しく行ったことが史料からうかがえます。こうした反対派の掃蕩を通して誕生した義元政権が家中における権力を集中させ国力を充実させることができたと考えられます。

(写真と文 中世担当調査委員 海野一徳)



乱の舞台となった花倉城(葉梨城)遠望
遍照光寺の住持であった今川良真の根拠地であった

天文5年(1536)11月3日付けの今川義元書状
義元方として奮戦した岡部親綱の戦功を義元が自筆で賞している



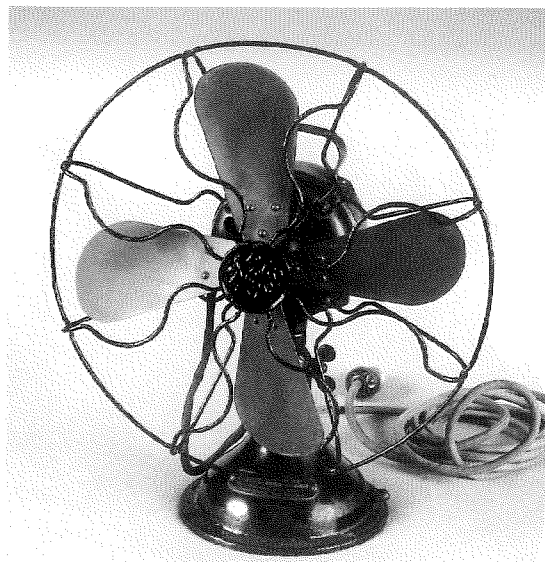
扇風機税があつた

— 葉梨村役場文書の語る生活 —

近現代担当調査委員

土居 和江

島田学園高等学校教諭



古い扇風機

翌昭和十六年の村予算書をめくると、扇風機税収入として十九円計上されています。税額は一台三円八〇銭なので、村に五台の扇風機があつたわけです。この年葉梨村の人口五六六一人、戸数八五七戸。かなりの贅沢品であつたことがわかります。『昭和・平成家庭史年表』で扇風機の項をたどると、電力不足の記事が散見される昭和十四年「六月 大阪北浜にある住友系の諸会社、消費節約のため扇風機を廃止」。昭和十六年には「一般用扇風機の製造が禁止、敗戦まで扇風機は海軍艦船用にのみ限られる」とこととなりました。そのような時代の扇風機税なのです。

昨夏から、近現代担当は行政文書の調査に取りかかっています。まだ調査途中ですが、旧村の役場文書が非常によく整理・保存されているのが特徴です。藤枝地域の近現代像を再現する作業にとって、これは大きな助けとなることでしょう。

ここ数回、葉梨村の昭和前半期の資料を見ていて、昭和十五年「村税賦課徴収條例設定の件」というファイルの中に、扇風機税という項目があるのに目が止まりました。村の独立税として、村民税の他に自転車税・荷車税・金庫税・犬税があつたのですが、この年扇風機税が新たに設けられました。

先の「葉梨村税賦課徴収條例」には、戦時もしくは事変のための応召者、出征者の家族・遺家族のうち、生活の扶助を必要とするものには地租付加税を賦課しないとの条項があります。軍人傷痕記章を有する人には、一台だけ自転車税を免ずるとも書いてあります。村は兵士の「後顧ノ憂ナカラシメン」ため、出征家庭の生活を支える役割を負いました。

葉梨村の「昭和十五年度分役場事務報告」の兵事部分は、淡々と記録されています。一、徴兵検査の状況 二、演習召集簡閲点呼の状況 三、海軍志願兵召募の状況 四、在郷軍人の状況 と、村の仕事を記録し「五、戦病死者 戦病死者八〇〇名ニシテ何レモ村葬ヲ執行シタリ」と。これを昭和五年・六年（満州事変

の年）の兵事報告——徴兵検査成績が詳細に記され、静岡連隊の小学校での夜間演習の模様が具体的に書かれています。——と比べると、大きな変化が読みとれます。

隣村稲葉村の昭和十五年事務報告は、「動員業務関係八固ヨリ応召兵出発帰郷、出征兵士・在隊将兵状況等二関シテハ其ノ筋ヨリノ達シニヨリ軍機秘密保持上詳細二記スル事ヲ得ザルニツキ」という書き出しで始まっています。葉梨村の、数字を伏せた淡々とした記載は、村の個性や記録者個人の個性を超えた、時代の反映であるようです。

旧村々はやがて合併し、藤枝市としての事務報告が書き継がれていきます。膨大な資料を読み込む作業には、まだまだ時間がかかりそうですが、地域の全体像を明らかにできるだろうと期待がもてます。

もう一方、行政文書では揃いきれない資料をどのように求めていくかという課題があります。お手持ちの資料がありましたら、ぜひ一報ください。

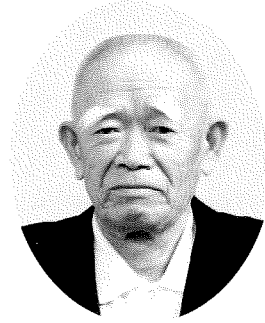
今回葉梨村昭和十五年の役場の記録を紹介しましたが、その頃を記憶されている方がいれば、生きた証言としても語られるのではないのでしょうか。

市民のみなさんの証言を求め、手記を書いていただいたり、アンケートに参加していただいたりできないものかと検討しています。具体案が固まりましたら、どうぞご協力ください。



葉梨村村会議案書

兵太夫新田開発と水利



深田喜十郎
調査協力員（高洲）

岩堀兵太夫氏を頭取として芝切十家が、新田開拓に着手したのが寛永八年（一六三一）で、記録を見れば開田は順調に進み、入植農家は逐年増加したことが判るが、文字には表現されていない先人のご苦労ご努力を忘れてはならない。

米作りは苗代作りから始まるが、新開最初は苗代適地が無く、領主の裁断で両隣りの高柳村と大住村（焼津市）から苗代適地三反六畝の提供を受け、稲作が始められたという。

時代は下りて、用水不足になやむ地区に對し新水路開設を農民が請願した。藩役人は不成功の場合は斬罪に処すとして、竹矢来の刑場を設けたという。幸い工事は成功したが、水利確保はまさに命懸けであった。この仕置き場辺を獄門原と称したという（谷沢文書）。

以上、舌足らずの文となったが、水の恩恵を再認識するとともに、今回貴重な資料を提供された岩堀様に対し深く感謝致します。

中世担当委員の紹介

専門委員長

湯之上 隆

静岡大学教授



過去は未来を生む神秘の泉、迷える現在の道を照らす燈火。これは作家永井荷風の言葉です。藤枝という地域の豊かな歴史をしっかりと明らかにすることによって、日本の歴史像を見通す方法と叙述を鍛えあげること、力を注ぎたいと考えています。東海道が通っていた藤枝の中世に関する資料は、予想以上にたくさん収集されています。現在、通史編の基礎となる、多くの工夫を加えた、わかりやすい資料編の編集作業に取り組んでいます。

調査委員

前田 利久

清水国際高等学校教諭



私が歴史にのめり込んだその出発点は、身近な郷土史にありました。しかし、長いことよその歴史ばかりを見て来たため、藤枝のことは分からないことだらけです。戦国時代の志太地域に関する史料は決して多くはありませんが、身近な地名は多数登場します。そこにとどまらず、寺院や神社、大名や武将、文化人らとどのように関わったのでしょうか。こういうことをテーマに、これを機会にわが郷土をじっくりと見つめ直したいと思っています。

調査委員

小川 隆司

県立島田商業高等学校教諭



私は、高等学校の社会科教員で、現在は島田商業高校に勤務しています。

もともと南北朝内乱期から室町時代の政治史に関心があったのですが、現在は戦国期とくに武田氏の駿河・遠江支配を研究テーマとしています。

藤枝市の田中城は、武田氏の駿遠支配において、志太榛原地域で中核的な役割を果たした城郭です。関連する史料も多く存在しますので、広い視野をもって藤枝市の歴史を位置付けていきたいと考えています。

調査委員

海野 一徳

藤枝市郷土博物館学芸員



博物館の運営や企画展の開催などを日頃の仕事としていますが、中世の調査委員として寺社や古文書の調査に参加させていただき、藤枝の歴史や地勢などを肌で感じることができました。

中世の藤枝には今川氏・花蔵の乱・田中城の攻防など注目すべきテーマがあるの、よい市史ができるよう勉強を重ねながら頑張っていきたいと思っています。

瓦がわらばん版

市史研究3と葉梨村誌を発刊

市史編さん事業の研究成果をまとめた『藤枝市史研究』第3号と市史叢書『葉梨村誌』復刻版を刊行しました。

『市史研究』第3号には、一八八〇年前後から一八九〇年代にいたる通信の事情と郵便の普及についての論文と、『万葉集』にある志太の浦がどこにあったかを考察した論文が掲載されています。このほか、水守遺跡の墨書土器と、心岳寺の大般若経についての調査報告、また「古代交通と志太郡衙」、「江戸時代の田中藩」と題して開催した市史学会の記録も収録されています。

『葉梨村誌』は、大正元年に手書きで書かれたものを、今回活字化して復刻したものです。葉梨村の当時の戸数は七六八戸、人口は四、四六七人でした。村誌には、神社・寺院・学校の沿革のほか、統計資料も掲載されています。

『葉梨村誌』（八〇〇円）、『市史研究』第三号（一、〇〇〇円）は郷土博物館で販売しています。また、『葉梨村誌』は、葉梨公民館でも販売中です。

青島村誌、瀬戸谷村誌販売中

『瀬戸谷村誌』（八〇〇円）・『青島村誌』（二、〇〇〇円）も、郷土博物館で好評発売中です。『瀬戸谷村誌』は、藤ノ瀬会館でも販売しています。

民俗編発行に向けて

『藤枝市史』別編・民俗が今春発刊となります。詳細は「広報ふじえだ」の市史編さんニュースに載りますので、ご注目下さい。

古代

古代担当調査補助員

石毛 彩子

藤枝市は、奈良・平安時代には、駿河国志太郡・益頭郡に属しており、市内にはこの両郡の役所である御子ヶ谷遺跡や郡遺跡などが存在しています。

これらの遺跡からは多数の墨書土器が出土しました。墨書土器とは、土器に墨で文字を記したものです。ここでは、その中から、御子ヶ谷遺跡で出土した「中衛」の墨書土器を取り上げましょう。

中衛は、都の役所である中衛府の略称と考えられます。この役所は、律令という当時の基本法典では定められていない令外の官で、神亀五年（七二八）に設けられました。その役割は、天皇を警護すること、大将・少将・将監・将曹・府生・番長・中衛舍人・使部で構成されていました。

「中衛」の墨書は、茶碗蒸しの蓋のような形をした奈良時代の土器の蓋の内側に書かれています。この墨書銘は、中衛府に関わる人に対する食事の提供に使用される食器であることを示したものと考えられます。当時の郡の役所には、地方行政の場だけでなく、公務で旅行する役人が宿泊したり食事をとつ



御子ヶ谷遺跡から出土した「中衛」の墨書土器

たりする館や、様々な儀式や行事の際に食事を準備する厨家と呼ばれる施設がありました。「中衛」の墨書土器もこの厨家で管理されていたものと思われる。

この中衛府と藤枝市との関係は、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）の宝字改元記事にみられます。この記事は、駿河国益頭郡の人である金刺舎人麻自が献じた蚕の吉祥句にちなんで天平勝宝から天平宝字へ改元されたというものです。この祥瑞を都に持参したのが、中衛府に中衛舍人少初位上賀茂君継手です。右の「中衛」の墨書土器も、賀茂君継手との関係で甚だ興味深いものです。

考古

考古担当専門委員

篠原 和大

藤枝市街地の西、瀬戸川南岸にある金比羅山の東端には、江戸時代から「九景寺の岩屋」として知られる九景寺古墳の石室があります。市内にはたくさん石室を持つ古墳が知られています。が、天井まで完全に残った状態の石室は、今では九景寺古墳以外に見られないようです。

藤枝市史の編さんにあたって、わたしたちはこの九景寺古墳の調査を開始しました。一九九八年には、石室周辺の試掘調査を行いました。昨年は石室内部の実測図を作成して石室の構造



九景寺古墳の内部

を調べる調査を行いました。石室の入口付近は、石が積まれて形状がわかりませんが、石室の長さは確認できる範囲で約五メートル、高さは奥壁付近で一・八メートル、幅一・八メートルあり、付近の石室の中でもかなり大型の石室になると考えられます。奥壁は二枚の大きな鏡石を用いてありますが、両側壁は四角く整えられた大きな石を積み上げてつくられている点が特徴で、志太平野には類例の少ない精巧なつくりといえます。

九景寺古墳の位置する瀬戸川沿いは、五州岳古墳や荘館山一・二号墳（前方後円墳）など、有力な古墳が集まっているところ。六世紀の終わるか七世紀頃につくられたと考えられる九景寺古墳に葬られた人々も、そうした有力者達の後裔だったのでしょうか。



九景寺古墳